The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	継承語教育文献データベースの構築 ： 中間報告
Author(s)	中島, 和子; 田中, 順子; 森下, 淳也
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2011, 7, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

≪招待論文≫

継承語教育文献データベースの構築
－中間報告－

中島和子（トロント大学名誉教授・桜美林大学言語教育研究所特任研究員）
nakajima@utoronto.ca
田中順子（神戸大学准教授）
jtanaka@kobe-u.ac.jp
森下淳也（神戸大学教授）
jm@kobe-u.ac.jp

The Development of Bibliographical Database of the Studies of Heritage Language Education: Interim Report

Kazuko NAKAJIMA, Junko TANAKA, & Junya MORISITA

キーワード：継承語、継承語教育、マイノリティ言語、文献データベース、
入力支援システム

要　旨

グローバル化に伴って国を越えて移動する年少者や異言語環境で学齢期を過ごす2世児、3世児が増える一方である。このような年少者の言語形成、人間形成にとって現地語の教育と同時に、親の母語・母文化継承（つまり子どもにとっての継承語・継承文化）は教育上重要な意味を持つ。国内の言語的、文化的に多様な背景を持つ外国人児童生徒にも継承語教育は必要不可欠であり、長い歴史を持つ継承日本語教育の知見が今やいかされるべき時が来ている。本研究は、未整理のまま放置されてきた継承語教育の文献を収集、整理、統括したものをデータベース化して母語・継承語・バイリンガル教育研究会（MHB）会員にMHBホームページ上で公開することを目的とする。このために、世界各地に在住する母語・継承語・バイリンガル教育研究会（MHB）会員の中から文献調査協力者を募り、現在2,135点の継承語文献が集まったところである。本稿は、データ収集・書誌情報入力をするという取り組みと、継承語文献データベースを構築してサーバーに搭載するという取り組みの両面から見たプロジェクトの初めの2年間の報告である。

1．背景と目的

海外に移住した日本人が、自分たちの母語・母文化である日本語や日本文化を次世代に継承する「継承語としての日本語教育」は100年以上の長い歴史を持つ。しかし、日本語を教える教育機関が教育者不在の零細な営みであることが多く、世界各地に散在する文献や情報が入手しにくいこと、またそのような教育的営みを研究の対象とする専門家がいなかったことなどの理由によって、「継承語としての日本語教育」は日本語教育の中でもっとも未整理な領域の1つと言われる（佐々木, 2003；中島, 2003)。昨近、日本国内に在住するブラジル系、中国系、ベトナム系、フィリピノ系その他のマイノリティ言語児童生徒に対しても、母語・継承語・継承文化教育の重要性が認識されつつあり、これまで海外で蓄積されてきた継承日本語教育の軌跡とその知見が国内でいかされるべき時が来ている。

高齢化・少子化のため労働人口減少にはどめのかからなくなっている日本にとって、外国人の受け入れに対するニーズは増える一方であり、それに伴って外国人年少者の言語と文化の継承問題が浮上している。海外の日本人児童生徒が経験してきたように、日本の公立小中学校で日本語を学習言語として学ぶ外国人児童生徒は、社会的に圧倒的に優勢な日本語のプレッシャーのもと、家庭で親が使用する母語（子どもにとっては継承語）が伸び悩み、親が母語で話しかけても子どもは日本語で応答するという状況に陥りがちである。このような2言語使用は親子のコミュニケーションに支障を来たすばかりでなく、2つの文化にまたがる健全なアイデンティティを育てる上でも、また年齢相応の学力を獲得する上でも大きな支障となるものである（湯川, 2006；中島, 2007)。

しかしながら、国内の現状は、継承語の保持・伸長の必要性に関する認識が深まりつつあるとは言え、継承語の制度上の位置づけもまた実践的な取り組みも地方自治体やNPO任せという状況にある。もっとも憂慮すべきことは、継承語、継承語教育を専門領域とする大学教育機関も学会もなく、そのために専門家が極めて育ちにくい状況にあることである。このような空白をわずかなりとも埋める役割を担ってきたのが、「母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会」である。MHB研究会は2003年に発足して以来、年次大会、研究集会、教師研修ワークショップ、紀要の発刊などの諸活動を通して、母語、母文化継承の問題と取り組んできている。現在、国内をはじめ、世界各地に500名強の会員を擁する研究会で、その対象領域も幅が広く、海外の日系人児童生徒、補習授業校児童生徒をはじめ、国内のオールドカマーの民族語・民族文化教育、ニューカマーの母語・継承語教育、ろう児の母語（手話）教育と多岐にわた

る。

本プロジェクトは、科学研究費補助金の支援を受けて2009年度から2011年度までの3年計画で始まったものである。研究課題は、「継承日本語教育に関する文献のデータベース化と専門家の養成」（研究代表者中島和子，研究分担者佐々木倫子，略して以下継承語科研と呼ぶ）で、その名称が示すように、2つの目的を持ったものである。第1は、前述したように継承語、継承語教育関係の主要文献を収集、整理、統括してデータベース化してMHB研究会のホームページ上で公開すること、第2はデータベース作成の作業を通して継承語教育の専門家の養成、質の高い継承語教師の育成に寄与することである。第1の目的を達成するためには、データベース構築に関する専門的知識と継承語教育に関する知識と関心のある数多くの人材を必要とする。そこで、目的1の作業になるべく多くのMHB会員を巻き込むことによって、目的2の継承語教育の専門家の養成につなげるということを考えたのである。プロジェクトは、図1のような構想のもとに進めることにした。まず文献収集と書誌情報の入力には、世界各地に在住するMHB会員に広く呼びかけて（B）の文献調査協力者を募集して協力を仰ぐこと、（A）地域あるいは領域に分けて、文献の収集や入力に関する整理や統括をMHB研究会理事にお願いすること、（D）専門家チームが人文科学系データベースを構築して稼働させること、そして（C）は、（A）（B）と（D）をつなぐこと、つまり、入力書誌情報をデータベース本体の構築との関係で整備、修正して一括して（D）に文献を提供することである。

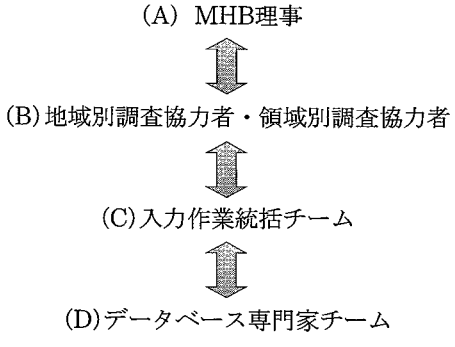


図1　継承語文献データベース構築の構図

以上のような構想のもと、（A）には11名の理事、（B）には延べ70名近くの会員が参加、（C）は、継承語科研代表者である中島とトロント在住の調査協力者である福川美沙さん、そして（D）には、神戸大学大学院国際文化学研究科の森下淳也教授、同じく

同研究科准教授でMHB会員でもある田中順子准教授に連携研究者となって本研究に加わっていただき、継承語データベースの構築をお願いした[1)]。

現在本研究は2年目の終わりを迎えて、やっと道半ばに達したかの感がある。ここでこれまでの経緯をしっかり振り返り、完成に向けての今後の指針としたい。以下、本中間報告は7節からなり、1節－3節は中島が執筆、4節－7節はデータベース構築の立場から田中が森下との協力のもとに執筆したものである。

2．データベースの作成手順と現在に至るまでの経緯

2.1. 文献収集開始期

ERICやGoogle ScholarやNACSIS Webcatのユーザーであっても、その裏の構造や成り立ちについて考える人はそんなに多くないであろう。(C) 担当の中島にとっても、データベース構築のプロジェクトは、その必要性は分かっても、その構築となると全くの門外漢であり、まず (D) である神戸大学の人文科学データベースの専門家にデータベースとは何かという話を聞くところから始めざるを得なかった。(D) との話し合いは、初年度の2009年5月19日を皮切りに頻繁に行われ、神戸大学訪問回数は2年間で計8回に及ぶ。

つぎに取りかかったのが、(A) のMHB理事への協力のお願いと、(B) の文献調査協力者募集である (2009年5月30日)。継承語教育と一口に言ってもマイノリティ言語の教育であるため、それぞれの国の言語政策の影響をもろに受ける。そのため、海外在住のMHB会員にそれぞれの国の事情を踏まえて継承語文献を集めてもらうということは、本プロジェクトのもっとも強い点である。この特徴をフルにいかすべく、世界を6つの地域に分け、国内は4つの領域に分けて協力者を募集することにした。その結果65名の会員の協力が得られた。

そこで調査協力者間の相互意思疎通のために、ヤフーのメーリングリストを立ち上げ、初年度10月1日からエクセル版仮テンプレート「継承語DB Version 1」を使った文献入力が始まった。Version 1は、書誌情報が28～48項目あり、その後改訂を加えて初年度の終わりにその改訂版である作業用テンプレート「継承語DB Version 2」を配付した。この間、顔の見えない相手をなるべく見える関係にするべく、調査協力者相談会を4回開催している。初年度は第1回 (2009年6月)、第2回 (同年8月)、第3回 (2010年3月)、次年度は4回 (2010年8月) である。第3回目の折には、全体会と分化会を開き、地域別・領域別調査協力者の顔合わせを行った。

文献収集が軌道に乗るにしたがって文献データを一時保存する格納庫が必要となり、クラウド型のオンラインストレージを使った無料文書ホスティングサービスの1つであるマイクロソフトの Windows Live SkyDrive を使って、地域別・領域別に文献を保存することにした。

2.2.　文献収集の基本方針

プロジェクトがまず直面したのは、継承語、継承語教育に関する文献とは何かという問題である。そこでつぎのⅠ～Ⅴの5点に焦点を当てて文献収集を行うことにした。前述したように、継承語教育がマイノリティ言語の教育であるがためにホスト国の言語政策や施策の影響をもろに受けること、歴史的にさまざまな経緯を経て現在に至っているという視点、また英語教育や国語教育と比べて言語や言語能力に焦点を合わせた専門的な調査研究が極端に少ないこと、というような事情を踏まえて考えた基本方針である。

Ⅰ　継承語全般に対してホスト国がどのような言語政策を持っているか
Ⅱ　継承語教育は、歴史的にどのような経緯で現在に至っているか
Ⅲ　現時点での国・地域・対象グループの継承語教育は、どのような状況にあるか
Ⅳ　継承語教育の成果がどのぐらい上がっているか
Ⅴ　継承語教育の将来の課題は何か

つぎに文献の種類であるが、最終的にはつぎの5種類のテンプレートに分けて入力をすることにした。しかしながらデータベース本体は1つであるため、5種に分かれてはいるものの、文献情報の入力方法にゆれのないように、統一がとれた形で入力作業を進める必要があった。この点に関しては本稿5節に詳しい説明がある。

1. 著書・章・論文・報告書
2. 口頭発表・ポスターセッション
3. 教科書・教材・ソフト・作品等
4. 雑誌・新聞記事
5. 政府刊行物・法律・条例・(公的)ガイドライン・スタンダード・学習指導要綱等

これらのうち、「継承語 DB Version 1」(2009) は上記の1.から3.のみ、「継承語

DB Version 2」(2010) になってはじめて1.から5.の全体を含むものとなった。どの文献もつぎにリストしたようなさまざまな書誌情報をエクセル上の入力欄にタイプするという形になっている。また各欄には、入力する際の決まりや注意事項が掲載されている。いわゆる入力マニュアルの簡易版である。

［通し番号］
［主要文献情報］（著者名、編者名、年号、タイトル）
［文献情報］　（出版地、出版社、掲載書、章、巻・号、ページ数、版回数、要旨・アブストラクト、概要、キーワード、翻訳、訳者名、訳本・原書名）
「文献関連情報」（著書種別、論文種別、大学名、報告書に関する情報、執筆形態、使用言語、ISBN、文献入手先、関連学会）
［入力関連情報］（対象領域、対象地域・国名、対象言語、入力日、入力者名・チェック者名）
［備考(1)(2)］

上に示したのはテンプレート1の著書・章・論文の入力項目である。実は、テンプレートの種類によって多少情報項目が異なる。例えば、テンプレート2ではセッション・パネル名、開催期間、テンプレート4では、副題、特集名、発刊日、連載開始日、連載終了日などが入力欄が加わっている。仮テンプレートから改訂作業用テンプレートへと移行する際に、項目数を少なくしてスリム化をねらったのであるが、表1に示すようにテンプレートによってはかえって項目数が増えたものもある。

表1　2つのテンプレートの入力項目数の比較

継承語DB	テンプレート					合　計
	著書・論文	口頭発表ほか	教材・ソフトほか	新聞雑誌記事	政府刊行物ほか	
Version 1	48	32	28	29	30	167
Version 2	30	34	36	34	32	161

前述したように、世界各地に在住する調査対象者を6つの地域に分類、国内に関しては4つの対象グループに分類した。6つの地域とは、カナダ、米国、オーストラリア、南米（ブラジル、ボリビア、アルゼンチン）、アジア（台湾、韓国、タイ、中国）、EU（イギリス、フランス、ドイツ、オランダ）である。実は当初24カ国もの参加があったが、

参加を希望したものの諸事情のため機能しなかった地域があり（例えば、スイス、スウェーデン、イタリア、メキシコ、ペルーなど）、2年目を迎えるころには、12カ国となって現在にいたっている。一方、国内の方は大ざっぱにつぎの対象グループ別に分類することにした。 オールドカマー（在日朝鮮人・韓国人、中国人）、ニューカマー（就労を目的で来日した労働者の子どもたちや中国帰国3世・4世や過疎地の呼び寄せ花嫁の子どもなど）、インターナショナルスクール（国内、国外を含む）、海外・帰国児童生徒、などである。各地域および対象グループの担当理事として統括の労を取ってくださったのは、カルダー淑子、ダグラス昌子（米国）、中島和子（カナダとオーストラリア）、佐々木倫子 （南米とアジア）、真嶋潤子（EU）、湯川笑子（オールドカマー）、友沢昭江、清田淳子（ニューカマー）、小澤伊久美（帰国児童生徒）、櫻井千穂（ニューカマースペイン語系）、津田和男の代理としての大山全代（インターナショナル）の諸氏である（敬称略）。

プロジェクト2年目になって、継承語の言語能力に関する実証的研究に関する文献が非常に少ないことに鑑み、目的2の専門家養成をかねて、OBC 会話力評価やバイリンガル読書力評価（B-DRA）に関するワークショップの開催と同時に、言語能力測定を目的とする言語能力調査協力者を募集した。このため約半数が「継承語文献調査」から「継承語言語能力調査」に移行する結果になった。言語能力調査協力者は、希望する言語能力の領域に関する企画書を提出し、その結果言語能力調査協力者と認定された50名の MHB 会員である。その領域は、バイリンガル作文調査、OBC 会話力調査、実態調査、意識調査と多岐にわたっている。文献調査協力者の数は減少したが、将来継承語に関するより質の高い調査研究がその代価となって返ってくる可能性を信じたい。

2.3. 収集文献の修正・整理・統括

エクセルを使う人は多いだろうが、50項目近くもある横長のテンプレートと格闘するのは決して楽ではない。しかも慣れない入力規定にそって、名字と氏名の間に全角スペースを入れる、キーワードは必ず半角コンマでつなぐ、日付を一定の書き方で埋めるなど、さまざまな些細なことに留意しての入力である。項目を設定する側も、人知を尽くして万全を期したつもりでも、実際に使ってみるといろいろな不具合が生じるのである。例えば、著者はあっても編集者、訳者を書き込む項目がなかったとか、執筆したものが書物の一部（つまり章）の場合にどう入力するか、とかいう問題がつぎつぎに出てくるのである。

このような試行錯誤の状況の中で、第一回のサーバーへの移行が始まり、参照データ

533本をもとに「継承語文献データベース検索結果お試し版」が完成した。このサーバーへの移行作業の過程で、さらにさまざまなデータ入力に関する問題点が浮上した。結果として、項目数を減らした作業用「継承語DB Version 2」という形になり、修正・加筆の必要なデータとそうでない優良データに分け、優良データのみを対象にサーバー移行の試みを重ねることになった。しかし、優良データと分類されたデータにも、かなり修正が必要な点が明らかになり、その結果多くの協力者に入力データの修正・加筆の労とっていただくことになった。この Version 1から Version 2への段階で浮上した問題点については、本稿4節から6節にデータベース構築の立場、つまり図1の（D）の立場）から詳しい説明がある。今後、引き続き入力文献数を増やしていく上で、情報の表記のゆれの矯正がどうしても必要であること、それがデータベース構築上どうして重要か、その意義について詳しく述べたものである。

2.4. 「継承語文献データベース編集管理システム」

2年目の終わりに、ついにこれまでの収集文献へのアクセスがウェブ上で可能になった。「継承語文献データベース編集管理システム」が完成したのである（2011年3月）。パスワードを入れて編集管理システムを開き、「もう横に長いエクセルを見ないでいいんですね！」と感激の声を発したのは日夜エクセル上の修正に悩まされて来た本プロジェクト助手の福川さんである。本稿4節の図4～図9がそのシステムの表示画面の例であるが、確かに色合いも優しくデザインもすっきりしている。そしてまた実に使い勝手がいい。表示、修正、削除がすいすいである。つぎつぎに出てくる文献を眺めているだけでも大いに勉強になる。こんな国にこんな文献があったのかと謙虚な気持ちになると同時に、これもあれも読んでみたいという学習意欲を駆り立てられる。継承語の世界はまさに1つという感を強くするのである。

今後はこの編集管理システムを使用して必要な修正を行い、重複データの削除その他を徹底的に行う。そしてその作業が終わったところで、MHB 理事と文献調査協力者にパスワードつきで公開する予定である。文献調査協力者には、未記入の入力項目（例えば、キーワードや入手先の情報など）をウェブ上で加え、それぞれの文献の書誌情報の入力を完成させていただきたい。

2.5. 「500字概要」の執筆と「全文テキスト」の収集

学術論文には著者執筆のアブストラクトあるいは要約が掲載されていることが多いが、これとは別に調査協力者が文献を読んでまとめた「500字概要」、「1000字概要」、そし

て執筆者に提供をお願いする「全文テキスト」(著者最終原稿) の3本立てでプロジェクトを進めてきた。しかし、初年度の終わりに集まった「500字概要」に目を通したところ、500字という制限にあまり意味がないこと、文献の内容によっては500字以上の概要が適当であることなどの理由で、500字から1000字ぐらいと余裕を持たせることにした。「全文テキスト」は論文をそのまま掲載することである。すでにウェブ上に掲載されているものであれば、リンク先の提供をお願いし、まだ紙媒体のものであれば、著者に論文の提供をお願いしたいと思っている。この場合著作権の問題を避けるために、出版社の修正が入る前の「著者最終原稿」を提供していただくべく、依頼状を用意しているところである。継承語、継承語教育に関する主要文献は、MHB 会員が書いたものが多いことから、会員同士の情報交換のためにも会員の協力を仰ぎたいと思っている。

3．文献収集に関するプロジェクトの現状

3.1.　文献総数とその内訳

まずこれまでにどのぐらい文献が収集できたかということであるが、過去2年間の節目節目に入力できた文献数は表2に示した通りである。図2に入力済み文献数の推移をグラフ化した。

表２　入力文献の累積数

年月	入力文献数	概要数	テキスト数
2010.2	1,205	0	0
2010.7	1,402	56	0
2011.2	1,769	91	0
2011.3	2,135	121	0

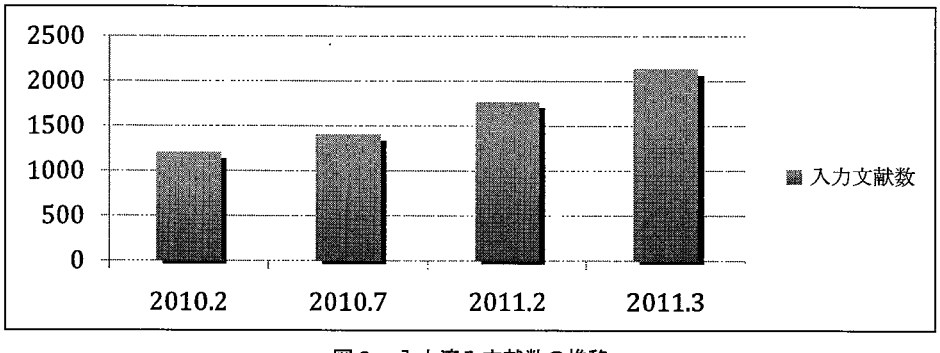


図２　入力済み文献数の推移

3.2. 収集地域と対象領域グループ

つぎに2011年2月に入力された文献を使用して文献数と「概要」数を対象グループ別に文献数の多い順番に並べると表3のようになり、国別に同じく文献数の多い順番に並べると表4のような結果になる。表4でみると、文献数の上位1位と2位と3位はブラジル・米国・カナダである。それに続くのがフランス、台湾である。

表3　対象グループ別入力文献数と「概要」数

対象グループ別	テンプレート						概要
	著書・論文	口頭発表	教材・ソフト	新聞雑誌記事	政府刊行物	合計	
ニューカマー	173	0	0	0	0	173	22
海外・帰国児童生徒	112	32	0	2	0	156	20
インターナショナルスクール	71	62	9	0	0	142	0
オールドカマー	62	2	51	1	0	116	10

表4　国別入力文献数と「概要」数

国　　名	テンプレート						概要
	著書・論文	口頭発表	教材・ソフト	新聞雑誌記事	政府刊行物	合計	
ブラジル	211	1	46	1	0	259	2
米国	225	2	1	1	0	229	24
カナダ	131	20	21	34	18	224	1
フランス	33	12	0	0	86	134	0
台湾	87	16	0	0	0	103	0
イギリス	56	13	25	2	0	96	0
ドイツ	50	0	0	0	0	50	10
タイ	20	1	0	3	0	24	0
オーストラリア	20	2	0	0	1	23	0
ボリビア	0	0	22	0	0	22	0
アルゼンチン	0	0	19	0	0	19	0
韓国	10	2	0	0	0	12	0

3.3. 文献の種別

つぎに収集された文献の種類をテンプレート別に見てみると、表5に示したようになる。著書・論文・章の数が全体の74％と圧倒的に多く、その他の口頭発表、教材・ソ

表５　入力文献の種別

著書・論文	口頭発表	教材・ソフト	新聞雑誌記事	政府刊行物	合計
1,587	167	194	57	130	2,135

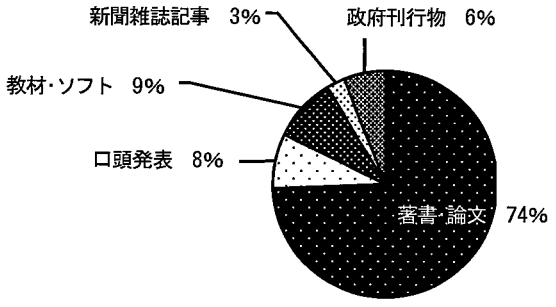


図３　入力済み文献の文献種別による分類

フト、新聞雑誌記事、政府刊行物ほかのテンプレートは、ほぼ同程度6％～9％の入力数である。これらをグラフ化したものを図3として提示する。

以上が数量的に見たデータベースの状況である。今後「継承語文献データベース編集管理システム」上で2,135点の文献が見られるようになった段階で、文献の種別、使用言語別、対象領域別、対象言語別、年代別、キーワード別その他、さまざまな角度からの分析を試みる予定である。

４．データベース構築上の問題

2.3.（収集文献の修正・整理・統括）では、データを作成する側からの困難点について述べた。本項ではデータベースを構築する側から見たデータベースの作成プロセスとその困難点について記述する。

通常のデータベース作成では、データベースに格納するデータの性質がわかっており、データに付与するIDのテーブルや各項目の定義域が用意されており、分類方法についても既知であるのが通常である（田中・森下・中島，2009, p.4）。しかし、この継承語文献データベースについては、当初目的とする分析項目が固まっていなかったために、項目の定義についても不定で流動的であった。このため、データを集めながら、データベースを作りながら、定義域を調整するという状況になった。神戸大学側（図1のD）とトロント側（図1のC）で何度もやりとりを重ねて、トロント側がデータベースに持っ

ているイメージをあぶり出し、どのようなものしたいのかを探り、データの広がりや定義域を設定して行った。

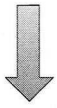
この過程において定義域が変化することで、結果的にエクセルの入力項目数や項目の属性が変移していくことになった。その結果、データ収集を行っている最前線の情報提供者は、提供されるエクセルファイル上に、項目の増減や、項目名やその属性に以前と比べて変更が行われていることを目にすることになった。その背後にあるラショナール(根本的理由)が不明のまま、対応をするよう求められたデータ作成者にとっては、不合理に思える作業だったであろう。

項目の見直しと忍耐力のいるエクセルファイルへのデータ入力を行った結果、現在の2,000例以上のデータが集まり、それら2,000余のデータが仮データベースに格納された状態である。現状では、既存のデータを整理するための「編集管理システム」を稼働させ、入力済みデータを自分たちで作った定義に照らし合わせて適合しているかどうかをチェックしている。このチェックの過程で、データがクリーンになるとともに、次の段階である「入力支援機能を備えたデータ管理システム」作成に向けて、項目自体や定義の妥当性を検討中である。以下では、現在までの過程について、当初予定していたプロセスと対応させながら説明を行う。

当初、「継承語教育文献データベースの構築」(田中他 2009)において、データベース作成手順として次のような11のプロセスを予定していた。当初の(8)から(11)の4段階のプロセスが新たに(8')(9')(11')の3段階に変更され、(12)が追加された。プライム(')をつけた段階は編集システム完成に関わる段階であり、田中他(2009)で示したプライムがついていない段階とほぼ同じ作業を行うが、目的が異なるものである。

(1) 仮テンプレートの作成
(2) 仮テンプレートへの入力
(3) 仮テンプレートの入力項目のチェック
(4) 仮データベースの稼働
(5) 作業用テンプレートの完成
(6) 入力マニュアルの作成
(7) 一部入力済みのテンプレートをSkyDriveに収納
　　(8') MHB作業部会員によるデータ入力
　　(9') 神戸大学継承語データベースに流し込む
　　(10) 削除

現時点　(11') ウェブインターフェースによる編集管理システムの作成



(12) 入力支援システム機能をもつ編集管理システムへの直接入力と編集作業

現在は、上記の (11') に掲げてあるようにウェブインターフェースを採用して「編集管理システム」を作成するところまで到達した[2)]。 データを受け入れる入り口がウェブ上に出来たのである。使用するためには、データ入力／編集のトップページ上で、データとして扱う項目を選ぶ (図4)。例として、「著書・章・論文 文献システム」を選んでみよう。

継承語データベースプロジェクト(エクセル版)編集管理システム (2011/02)

閲覧する項目をクリックしてください。

項　目	コメント
著書・章・論文 文献システム	著書・章・論文の文献システムです。
口頭・ポスター発表 文献システム	口頭・ポスター発表の文献システムです。
教科書・教材・ソフト・作品等 文献システム	教科書・教材・ソフト・作品等の文献システムです。
雑誌・新聞記事 文献システム	雑誌・新聞記事の文献システムです。
政府刊行物・条例・パンフレット等 文献システム	政府刊行物・条例・パンフレット等の文献システムです。
概要 文献システム	概要の文献システムです。

このシステムは最新のシステムに合わせて作られています。 入力が可能ならば、多言語の混在できる情報システムとして、 文字コードをユニコードに統一いたしました。
また、使用する画面の大きさとして、標準的な1,024x768画素の画面を想定しています。

図4　継承語データベースプロジェクト（エクセル版）編集管理システムトップページ

「著書・章・論文　文献システム」を選ぶとデータのリストが現れる(図5)。この画面で、新しく文献についての情報を入力したい場合はリストの最上部にある「新規作成」のボタンを選択する。そうすると新規作成のウィンドウ（図6）が現れる。それぞれの入力項目行の右端に、入力方法についての注意事項を添えた。これは、2.2で言及した「入力する際の決まりや注意事項［で]...いわゆる入力マニュアルの簡易版」を編集して移植したものである。この入力注意事項を編集するまでには、実際に持ち込まれるデータの種類と、データを入力する人の入力行動を数多く観察し、それに応じてエクセルシート上の項目を編集することを通じて、知識を得ることが必要であった。

継承語文献データベース管理編集システム:著書・章・論文

以下の結果が得られました。

トップに戻る.

検索結果

データ数= 1001 件

新規作成

通し番号	年号	著者名	タイトル（原文）/ 著書・論文・章タイトル（英文または和文）	操作
1	1997	米田　佐紀子	A Case Study of Language Transfer : An Investigation into the influence of L2 on L1 (言語干渉の事例研究：第二言語による第一言語への影響)	表示 編集 削除
2	1998	米田　佐紀子	日本語と英語における自動詞と他動詞の言語移転の予備的研究 (A Preliminary Study of Language Transfer: A Comparison of Intransitive and Transitive Verbs in Japanese and English)	表示 編集 削除
3	1999	米田　佐紀子	二言語併用者個人についての研究—WeinreichのLanguages in Contactとその後の研究—	表示 編集 削除
4	2000	米田　佐紀子	言語干渉基礎研究—WeinreichのLanguages in Contactに見られる言語干渉の定義・研究意義と音声干渉の研究—	表示 編集 削除
5	2000	米田　佐紀子	文法に関する言語転移基礎研究—WeinreichのLanguages in Contactにおける文法転移研究を中心として— (A Preliminary Study of Language Transfer: An Overview of Grammatical Language Transfer with focus on Languages in Contact by Weinreich)	表示 編集 削除
6	2002	米田　佐紀子	WeinreichとOdlinの比較研究から見た言語転移メカニズムの研究	表示 編集 削除
7	2010	花井　理香	韓国の言語・教育政策と日本語の継承－在韓日本人妻と韓日国際結婚家庭を中心として－	表示 編集 削除
8	2001	Kimi Kondo-Brown	Heritage language students of Japanese in traditional foreign language classes: A preliminary empirical study	表示 編集 削除
9	2009	Neriko Musha Doerr, Kiri Lee	Contesting heritage: language, legitamacy, and schooling at a weekend Japanese-language school in the United States	表示 編集 削除

図５　入力済み文献リストのトップリスト

継承語文献データベースエクセル版編集システム(著書・章・論文:新規作成)

リストに戻る.

新規作成

送信

通し番号		
著者名		* 著者と著者の間は「」（半角コンマ）で区切ってください * 姓と名の間は空白を入れてください * 日本語の場合は姓が先、英語名の場合は名が先 * 日本語、韓国語、中国語の場合は全角の空白、英語の場合は半角の空白 * 英語名はフルネームで記入
編者名		* 著者と著者の間は「」（半角コンマ）で区切ってください * 姓と名の間は空白を入れてください * 日本語の場合は姓が先、英語名の場合は名が先 * 日本語、韓国語、中国語の場合は全角の空白、英語の場合は半角の空白 * 英語名はフルネームで記入
年号		数字は半角
タイトル（原文）		* 日本語の場合は全角、英語の場合は半角で入力 * 英文タイトルの場合、大文字、小文字の使用は自由 * 数字は半角 * 章（chapter)も含む
著書・論文・章タイトル（英文または和文）		* 日本語・英語の作品の場合、英文タイトルがあれば記入、日本語、英語以外の言語のタイトルの場合は英文または和文タイトルを（）の中に入れる * 数字は半角
出版地		* 日本語の場合は記入なし * 地名がマイナーの場合は、半角コンマ、次に都市名、そして /の後に国名(原語）を入れる。（例：Manwah, NJ/USA)
出版社・出版元		

図６　新規作成の画面の一部

新規入力ではなく、既に入力済みのデータの詳細を表示したり、編集したり、削除したい場合は、操作の列から適切なボタンを選択する。データの詳細表示画面、編集画面、削除画面を、それぞれ図7、図8、図9で示す。

この図７では、中島和子著の「継承語日本語学習者の漢字習得と国語教科書」についての詳細を表示した場合を例として示している。この画面上のデータを編集したい場合は、左上の「リストに戻る」を選択して、図５のリスト表示に戻り、右端の「操作」の欄から「編集」のボタンを選択する。そうすると編集画面が表示される（図８）。図８

継承語文献データベースエクセル版編集システム(著書・章・論文:詳　　細)

リストに戻る.

詳　細

参照データ=566 番

通し番号	356	
著者名	中島　和子	* 著者と著者の間は「,」（半角コンマ）で区切ってください * 姓と名の間は空白を入れてください * 日本語の場合は姓が先、英語名の場合は名が先 * 日本語、韓国語、中国語の場合は全角の空白、英語の場合は半角の空白 * 英語名はフルネームで記入
編者名		* 著者と著者の間は「,」（半角コンマ）で区切ってください * 姓と名の間は空白を入れてください * 日本語の場合は姓が先、英語名の場合は名が先 * 日本語、韓国語、中国語の場合は全角の空白、英語の場合は半角の空白 * 英語名はフルネームで記入
年号	2002	数字は半角
タイトル（原文）	継承語日本語学習者の漢字習得と国語教科書	* 日本語の場合は全角、英語の場合は半角で入力 * 英文タイトルの場合、大文字、小文字の使用は自由 * 数字は半角 * 章（chapter)も含む
著書・論文・章タイトル（英文または和文）	Acquisition of kanji by Japanese heritage learners and Japanese textbook	* 日本語・英語の作品の場合、英文タイトルがあれば記入、日本語、英語以外の言語のタイトルの場合は英文または和文タイトルを（）の中に入れる * 数字は半角
出版地		* 日本語の場合は記入なし * 地名がマイナーの場合は、半角コンマ、次に都市名、そして　/の後に国名(原語）を入れる。（例：Manwah, NJ/USA)
出版社・出版元		
掲載書・掲載誌		
章		* 章の番号を半角数字で記入
巻・号		* 数字は半角 * 日本語の場合は○○巻,○○号 * 日本語以外の場合は Vol.○、No.○

図７　入力済みデータの詳細表示画面の一部

では、中島和子・鈴木美智子著の「継承語としての日本語教育―カナダの経験を踏まえて―」の例が表示されている。図7とは異なり、著者名や年号などの項目が白抜きのボックス内に示されており、白抜きボックス内の情報は変更することが可能になっている。編集作業が終わると、画面上部の「更新」ボタンをクリックすることによって項目情報の変更がデータベースにとりこまれる。項目情報の変更をデータベースに取り込ませたくない場合は、編集画面の左上あるいは左下にある「リストにもどる」（左下にあるものは図8には含まれていない）をクリックする。

また、既に入力したデータを削除したい場合は、図5のリスト一覧画面で、右側の操

作欄から「削除」を選択すると削除画面が現れ（図9）、削除ボタンをクリックすると削除が行われる。

既に入力したデータに重複があった場合等は、この「削除」機能を使って、重複しているエントリーのうちの一つを削除することになる。図9のデータを削除したとすると、図9上部の「通し番号」の642が空番地になる。次に新しいデータを追加した場合は、空き番地の642を埋めるのではなく、現存の最大の番号に1を追加した番号が追加データに付加される。例えば、現存の最大の番号が785だったとすると、新しいデータを新規作成した場合にはその新しいデータに786が付与されるのである。

継承語文献データベースエクセル版編集システム(著書・章・論文:編　集)

リストに戻る.

編　集

参照データ＝852 番

更 新

通し番号	642	
著者名	中島　和子, 鈴木　美知子	* 著者と著者の間は「」（半角コンマ）で区切ってください * 姓と名の間は空白を入れてください * 日本語の場合は姓が先、英語名の場合は名が先 * 日本語、韓国語、中国語の場合は全角の空白、英語の場合は半角の空白 * 英語名はフルネームで記入
編者名		* 著者と著者の間は「」（半角コンマ）で区切ってください * 姓と名の間は空白を入れてください * 日本語の場合は姓が先、英語名の場合は名が先 * 日本語、韓国語、中国語の場合は全角の空白、英語の場合は半角の空白 * 英語名はフルネームで記入
年号	1996	数字は半角
タイトル（原文）	継承語としての日本語教育ーカナダの経験を踏まえてー	* 日本語の場合は全角、英語の場合は半角で入力 * 英文タイトルの場合、大文字、小文字の使用は自由 * 数字は半角 * 章（chapter)も含む
著書・論文・章タイトル（英文または和文）	Japanese as a Heritage Language: The Canadian Experience	* 日本語・英語の作品の場合、英文タイトルがあれば記入、日本語、英語以外の言語のタイトルの場合は英文または和文タイトルを（）の中に入れる * 数字は半角
出版地	Welland/Ontario	* 日本語の場合は記入なし * 地名がマイナーの場合は、半角コンマ、次に都市名、そして /の後に国名(原語）を入れる。（例：Manwah, NJ/USA)

図８　編集画面の一部

継承語文献データベースエクセル版編集システム(著書・章・論文:削　除)

リストに戻る.

削　除

参照データ=852 番

削 除

通し番号	642	
著者名	中島　和子，鈴木　美知子	* 著者と著者の間は「,」（半角コンマ）で区切ってください * 姓と名の間は空白を入れてください * 日本語の場合は姓が先、英語名の場合は名が先 * 日本語、韓国語、中国語の場合は全角の空白、英語の場合は半角の空白 * 英語名はフルネームで記入
編者名		* 著者と著者の間は「,」（半角コンマ）で区切ってください * 姓と名の間は空白を入れてください * 日本語の場合は姓が先、英語名の場合は名が先 * 日本語、韓国語、中国語の場合は全角の空白、英語の場合は半角の空白 * 英語名はフルネームで記入
年号	1996	数字は半角
タイトル（原文）	継承語としての日本語教育ーカナダの経験を踏まえてー	* 日本語の場合は全角、英語の場合は半角で入力 * 英文タイトルの場合、大文字、小文字の使用は自由 * 数字は半角 * 章（chapter)も含む
著書・論文・章タイトル（英文または和文）	Japanese as a Heritage Language: The Canadian Experience	* 日本語・英語の作品の場合、英文タイトルがあれば記入、日本語、英語以外の言語のタイトルの場合は英文または和文タイトルを（）の中に入れる * 数字は半角
出版地	Welland/Ontario	* 日本語の場合は記入なし * 地名がマイナーの場合は、半角コンマ、次に都市名、そして /の後に国名(原語）を入れる。（例：Manwah, NJ/USA)
出版社・出版元		
掲載書・掲載誌	カナダ日本語教育振興会	
章		* 章の番号を半角数字で記入

図９　削除画面の一部

５．データ表記の整理と著者と「人」との対応の問題点

現在は、データ作成者によって集められたデータを編集管理システムに投入したところである。今後は、(1) 編集管理システム内で表記を統一するなどのデータの整理を行い、次に、(2) 氏名と指し示す対象との対応の整理を行う。表記を整理した文献情報を、人と関連づけて、別のデータベースに移植する。この移植後のデータベースが一般ユーザに提供するデータベースとなる。技術的な話になるが、非常に重要なことである

ため、(1) と (2) の作業について紹介をしておく。

(1) 表記の統一

エクセルで作成されたデータの中には表記の不一致が非常に多く見られた。例えば次のような例が表記の不一致であると見なされる。

スペースの有無、スペースが全角・半角であるかの問題

中島＿良子（中島と良子の間に全角スペースがある。下線で強調した部分参照）

中島_良子　（中島と良子の間に半角スペースがある。下線で強調した部分参照）

中島良子　（中島と良子の間にスペースがない）

表記法のゆれによる問題

Nakajima Ryoko

Nakazima Ryooko

Nakashima Ryoko

上記のいずれの例にしても、データを作成する人が想定している著者は同一対象者を想定して書かれたことは想像できる。しかしながら、コンピュータプログラム内では同一の情報とは見なされないため、表記の統一が必要となる

もちろん、表記の不一致は著者名に関わるだけではなく、項目を区分けするための記号の用法（読点[、]、カンマ[,]、コロン[：]等の使用）にもあてはまる。

(2) 氏名と氏名が指し示す対象である「特定の個人」との対応の整理

山田花子という名を使用している著者が2名（トロント大学の山田花子、神戸大学の山田花子）いると想定する。この場合は二人の山田花子に別のIDをふる。さらにこの二人ともにいろいろな氏名の表象（いわゆる別名、alias）が存在すると想定しよう。

いろいろな氏名の表象（いわゆる別名、alias）

① 佐藤花子（学術論文を書く際の氏名で旧姓を伴うもの）

② 水原花子（ペンネーム）

③ 山田花子（学術論文を書く際の氏名で本名と同一．トロント大学所属）

④ Yamada, Hanako（英語表記１）

⑤ Yamada Mackenzie, Hanako（英語表記２）

⑥ 山田花子（学術論文を書く際の氏名で本名と同一．神戸大学所属）

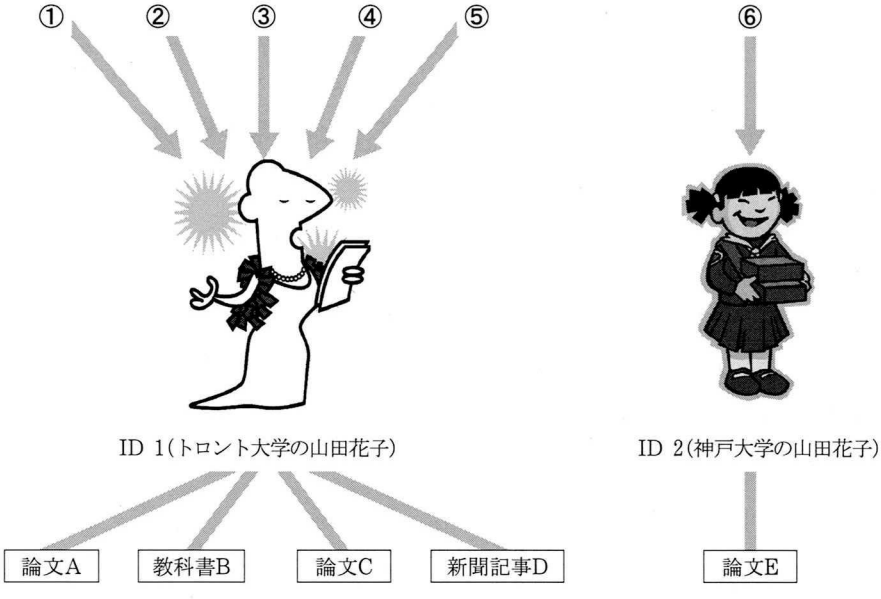


図10　トロント大学の山田花子と神戸大学の山田花子をノードとして文献を結んだ図[3)]

この二人の著作と思われる文献が複数あるとする。データベースに入れられるような情報にする為には、様々な氏名の中から典型的な表象（最も代表的な名前で、現在学術論文を書く際に使っている氏名）を一つ選択し、その典型表象を「特定の個人」とその人が書いた数々の論文とをつなぐ節（ノード）として使用することでシソーラスを作成する。複数の氏名と「特定の個人」との間の関係性を見分けて関係づけるのは、そのような判断をすることが可能な人である。まずは著者本人が、次には有識者（当該分野の専門家）が関係づけを行えるであろう。データベースを検索する際には、このシソーラスを参照してデータの呼び出しを行う。このようにして複雑な著者名、典型表象、文献をつなぐことによって、後でも述べるがデータベースの最終的な形として一般に供与できる形にすることができる。今後はここで述べた（1）や（2）のようなことを解決できるシステムを構築していくことになる。

6．データベース開発の今後

6.1　入力支援システムの開発

今回図4から図9で提示した編集システムは、現在限られた人間のみがアクセス可能である。将来的には現在の編集システムを発展・向上させて、データを作成する人がエ

クセルファイルの形でではなく、ウェブ上からデータを入力できるようにする予定である。その際には、既存のデータを参照して入力ができるようにインクリメンタルサーチ（語の一部を入力すると、その後に続く文字の候補が現れるようなシステム）を取り入れる。

6.2. 検索システムの開発

このデータベースプロジェクトが想定しているデータベースのユーザは学術機関の研究者や、継承語教育の現場で指導に当たる教員や指導員である。この人達が関心を持っている言語教育や言語学習状況が他所に存在しないか、そのような状況についての研究報告が既になされていないかどうかを検索できるようにするためのインターフェースを開発する予定だが、どのような検索機能を持たせるのかについてはまだ未定である。論理演算（and, or, not等）をプルダウンメニューで選べるようにしてインターフェースに埋め込んでキーワードサーチを可能にする、あるいはシソーラスを用意して曖昧検索ができるようにするかについては、データベースを一般供与する段階で考えなければならないが、現在はまだその段階ではない。

6.3. 検索結果の表示方法の検討

検索結果の表示方法については、一般ユーザ用とプロジェクト開発者側の両方の用途を考えなければならない。この表示の仕方については一般のサービスに供与する段階での話であり、現在はまだ検討中である。検討中の一案を紹介するとすれば、一般ユーザ用としては本データベースで検索した結果を ERICのような表示様式で提供する方法が挙げられる。検索したデータに該当するデータをリストし、そのリストから当該データのスナップショット（データの全項目を一つのカード上に提示したような形態）を表示できるようにするものである。最適な見せ方がどのようなものであるのかについて、データベースの開発と共に検討を続けて行く。

プロジェクト開発者側についての表示方法は、むしろデータベースの評価の問題につながる。データベースの入力システムが完成し、データを作成する人が増えて行くと、増え続けるデータがある時点でどのような形であるのかをとらえる為にはデータの分析が必要になる。現在のようにデータ数が2,000件程度であれば、手計算なり目視なりでデータの中身の概要を知ることができる。しかし、データが10,000件を越えたならば手計算や目視で中身をとらえることは不可能である。プロジェクト開発者がデータの現状を知り、データの分析をするためにも、検索システムが必要となる。

7．まとめと今後の展望

現在はデータベースサービスの一般への供与に向けて作業を行っている。今後、幸いにも一般へのサービスが開始されたならば、次のような問題も検討が必要である。一旦データベースが完成して一般に供与を始めると、どのように使用されているのかを評価しなければならない。どのようなIPアドレスからどれくらいの期間アクセスがあり、どのような情報が検索されているのかを評価し、データベースの使用実績や、想定していたデータベースの使用目的と実際の使用との関連を評価する。このような分析を可能にするためにも「きれいな」データをデータベースに入れる必要がある。まさにそれを可能にするために今までに行ったような項目の整理や、定義を明確化する等の作業が必要なのである。今までに時間をとって行って来た作業はこのような大きな意義のためであるから、入力作業にあたっていた方々にとって一見無駄な繰り返しに見えたような作業も、その労が報われるに違いない。前述したように、データベースを一般に供与するならば、供与しただけで終わりではない。データベースの使用の実態を評価することができてこそ、このプロジェクトが完結するのである。

注

1）本プロジェクトは、多くの会員・非会員の方々に支えられてきた。この場を借りて感謝の意を表したい。多忙を極める中データベースのサーバー上の構築を引き受けてくださった神戸大学大学院国際文化学研究科の森下淳也教授、同研究科の田中順子准教授をはじめとして、調査協力者として文献収集・入力作業に加わった70名近くの世界各地在住の会員、指導、整備、統括に当たってくださった理事の方々、さらに北米の著作権事情を調査してくださったダグラス昌子先生、著作権問題で貴重なアドバイスを下さった新潮社著作権管理室の宮部尚氏、理事のカルダー先生、同じく著作権問題で力を貸していただいた国立教育政策研究所の坂谷内勝教授に心からお礼を申し上げたい 。

2）今後さらに(12)を加えて、最終的にはウェブインターフェースを持つ「入力支援編集管理システム」を作成する。

3）図10の人物イラストはMicrosoft(2008)より転載した。

謝辞

本研究は平成21-23年度科学研究費補助金（基盤研究(B)課題番号21320096）研究代表者中島和子　課題名「継承日本語教育に関する文献のデータベース化と専門家の養成」の助成を受けたものである。

参考文献

Microsoft. (2008). Microsoft Word for Mac 2008 [Computer software]. Seattle, WA : Microsoft.

国立国語研究所日本語教育センター 「児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究」研究チーム（1996）「児童生徒に対する日本語教育のカリキュラムに関する国際的研究　基礎文献目録」 国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部

佐々木倫子（2003/2010）「3代で消えないJHLとは？日系移民の日本語継承」『母語・継承語・バイリンガル教育研究会』プレ創刊号　16-25.

田中順子・森下淳也・中島和子（2009）「継承語教育文献データベースの構築」第15回公開シンポジウム 「人文科学とデータベース」発表論文集　1-6.

中島和子（2007）「外国語習得と母語との関係-セミリンガル現象の要因と教育的処置に関する基礎的研究」科学研究費補助金基礎研究（B）最終報告

中島和子（2008）「継承語教育に関する学会・研究機関・紀要・機関誌・参考文献」2008年度母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会年次大会 「バイリテラル・バイカルチュラルの育成を目指して－実践と課題－」資料集　45-54.

中島和子（2003/2010）「JHLの枠組みと課題-JSL/JFLとどう違うか」『母語・継承語・バイリンガル教育研究会』プレ創刊号　1-15.

中島和子（2011）「科研（B）継承日本語教育に関する文献のデータベース化と専門家養成－マイノリティ児童生徒の言語教育・文化教育に関する総合的研究－」2011年度桜美林大学言語教育研究所公開研究会 口頭発表　2010年2月18日 桜美林大学四谷キャンパス地下ホール

半田正夫・紋谷暢男編（1982/1988）『著作権のノウハウ』第3版　有斐閣選書

福川美沙（2010）「データベース入力における問題点と留意点」（桜美林大学）第2回継承語教師養成ワークショップ資料集　71-73.

湯川笑子（2006）「年少者教育における母語保持・伸長を考える」『日本語教育』128号　13-23.